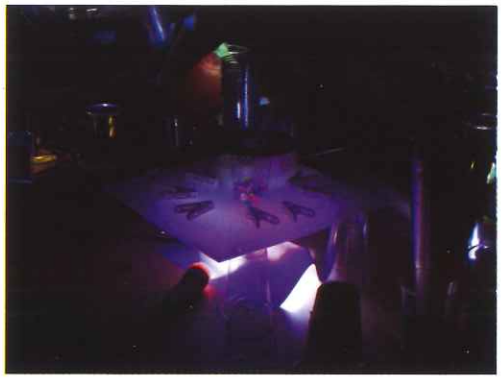
幼年美術

597

2018 9・10月合併号

発行所 大阪府東大阪市長田中４丁目６－３
ぺんてる(株)大阪支社内
全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎(06)6747-1601
発行人 廣富靖海
年間購読料 3,000円 １部300円（送料込み）

木代喜司副会長挨拶



実技研修K

全国幼年美術の会 第55回 夏季大学報告

実技研修H

絵を読む会

巻頭言

ハラショー

父がシベリアへ抑留。その間、福知山の母の実家へ疎開。父のいない淋しさを、私は絵日記をかくことと、毎日外に出て写生をすることで、紛らわせていたようです。自分の世界を持てたからでしょう。私の絵日記には、先生から「毎日、丁寧です。又かこう」という様なコメントをいただき、感謝しています。又、写生は、祖母と母が、私の心の動きを読み取って評価してくれたことを思い出します。生きる力になっていたのだと思っています。

そんな父も無事帰国。シベリアのハバロフスクで生き延びられたのは、荷揚げをしたニシンを、こっそり服の下に持ち帰り、黒パンを持つロシア人のおばさんと交換してもらっていたからでした。そのロシア人の太ったおばさんは、「ハラショー」と父に声をかけ、ニシンを黒パンに交換してくれたそうです。「明日はもっと取ってこい」と、見張りであるはずの兵隊は、そのおばさんからニシンをもらうので、見て見ぬふり。なかなか大まかな国のようです。先日のテレビで、平昌冬季オリンピック、フィギュアスケート女子シングルの金メダリストであるザギトワが、もらい受けた秋田犬について尋ねられ、「ハラショー」と語っていました。「元気です」と訳されていて、懐かしい言葉に久方ぶりに出あいました。又、荷揚げに行く途中に幼稚園があり、みていると先生が両手を上に上げてキラキラ。子どもたちがみんな揃って出来るまで、その真似をさせていたとも聞きました。自由に遊んでいるとこは見たことがなかったそうです。世界児童画展に出てくる絵をみていると、モスクワから樺太まで押し並べて同じ表現の絵が多いように感じます。実際はどうなのでしょう？ 一人一人の思いや考えはどうなのでしょう？ と、父の懐かし話とともに、お国柄の違いを垣間見たようです。

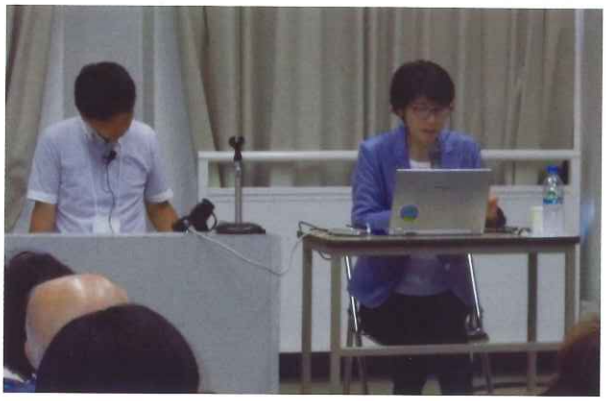
全国幼年美術の会 副会長 奥山淑子

全国幼年美術の会　第55回夏季大学

8月4日(土)、京都市伏見区のある、龍谷大学深草キャンパス2号館において、第55回夏季大学が開催されました。全国からこども園、保育所(園)、幼稚園、小学校の先生方を中心に198名、会場である龍谷大学の短期大学部こども教育学科1回生141名、それ以外の大学生48名、その他来賓・スタッフを合わせて約400名もの参加者のもと、大変猛暑の中ではありましたが、本年も活気溢れる、有意義な発見や学びの一日となりました。

午前中は実技研修を12講座に分かれて実施。各教室からは、楽しそうな歓声が聞こえてまいりました。詳細は、後頁にて、更に次号にて報告させていただきます。

講演は、河邊貴子(聖心女子大学)先生から、「遊びを中心とした保育再考 ～遊びをどう理解し、援助するか～」を講題に、保育者の専門性について、その核となる「子どもを深く理解すること」、その為の記録の大切さを、ご自身が直接関わられる幼稚園の事例を紹介されながら、お話くださいました。生憎、前日から、体調を崩されてのご登壇でしたが、当たり前のようで、当たり前にならないことを見つめ直すことの大切さを懇切にお話くださいました。当初は、質疑の時間を半時間用意していましたが、体調のことで既に地元の医療機関にアポイントを取られましたので、質疑時間は中止となりました。しかし、ちょうど当日、河邊先生が年に何度か定期的に伺い、研修を重ねられる、京都の泉山幼稚園の先生方が多数参加されていたので、先生のご指導を通して、同園が実践されるようになったこと、それによって、先生たちご自身や保護者が如何に変わっていったのかということについて、種々質問をさせてもらいました。突然の「無茶ぶり」にも拘わらず、精一杯お話しをしてくださいました、泉山幼稚園の有能な先生方に、この場をお借りして、御礼申しあげます。



河邊先生講演

午後からは、「絵を読む会」が実施されました。幼美が幼美と名乗る上では、欠くことの出来ない、大切な学びの時間を、昨年から、午後の全ての時間を使って実施されました。じっくり時間をかけ、絵を通して、こどものこと、保育・教育のこと、様々な背景に思いを致しながら話し合いがなされました。

運営面でも、昨年の反省から種々試みています。まだまだ課題もありますが、反省と試みの、弛みない繰り返しに努めて参ります。参加者にとって、日頃の活動の鏡となり、「こどもに学ぶ」姿勢への再スタート、原動力となる環境作りに励みたく思っています。

(羽溪)

絵を読む会

絵を読む会 い
【中国幼年美術の会】
担当：清川 里佳

この会の参加者で絵を持参してくださった十人の先生方は、

・子どもの発達が気になったから

①同じ子どもで、大きな成長が見られたから

②ある一連の保育の中から生まれた活動で、それぞれの心が見えたから

③同じテーマでも一人一人感じ方、捉え方が違って面白かったから

このような理由からであった。

一枚ずつ、その絵の背景を聴きながら、全員の先生や学生さんからも感想や質問をいただいたり、奥山先生に助言をいただいたりした。色使いや形にならないことが、年齢・月齢から見ると発達がゆっくりで心配だという子の絵に関しても、生活経験が足らないからであって、色々な経験を重ねながら見守っていく中で伸びていくことを皆で学ぶ。

中に『ちょうちょ』が題材の絵が三枚あった。

虫探検で、さなぎを見つけクラスで飼育することに。「かおるこちゃん」という名前を付け、毎日毎日、早くちょうになるよう願っていた。数日後、子ども達がいない間にやって来た台風にさなぎは、飛ばされていなくなる。探すも見つからず困った担任だったが、事実を子どもたちに伝えた。すると、クラスでミーティングが始まり絵を描いて残すことに決まる。子ども達はそれぞれの思いで大好きだったかおるこちゃんを表現した。休憩中、その中の一枚の絵を見ていた学生二人は、ハートの形の模様に「これ？なに？」「ちょうにも心があるのかな？」「きれいないろだね」そんな素敵な会話を弾ませていた。子どもたちが思ったこと、感じたことを自分で表現できるって素晴らしいこと。これからも、そんな表現へ繋がる子どもたちの生活支援をしていきたいと思った。

絵を読む会 ろ
【石川幼年美術の会】
担当：田島 千香子

二歳児から五歳児、小学生の子ども達の絵を見ながら、その絵が生まれた背景や戸惑っていることなどを聞き話し合った。又、助言者やフォロー者の先生方からのアドバイスの言葉をいただいた。

〈二歳児〉

なぐり描きの絵、友達の絵を見て描くのをやめてしまう子や描く時間が短い子がいる。

「ばけたくん」の絵本を見て描いた絵。一枚の画用紙に仲良し二人の子どもがおばけを描く。

○子どもが「これでいい」と言う時は、それで良いと思う。色々なもので描いたり、大きな紙に皆で描くなど面白かった経験を両立していく。「ばけたくん」の絵は、子どもの気持ちを大切にしている。しかし絵本のおばけにとらわれない方が良い。内から出るものを受け止める造形活動を大切にする。

〈三歳児〉

塗り広げによる絵（トマト・ハンバーガー・イモムシ）

○段ボールのスタンプは保育者が準備しているが、三歳児でもできる。発達を見て何にチャレンジしていくかを学ぶ。

〈四歳児〉

好きな絵、絵の具のたらし絵（雨）、育てて食べた後に描いたスイカの絵。男女別々のテーマで描いた絵（男の子は「ジンベイザメ」、女の子は「もったいないばあさん」の絵）

○好きな絵の中の小さく描かれた絵も素敵である。大きく描けない子どもには、紙を小さくしたり窓などに描いたりしてあげても良い。又、形にならなくても経験させながら待つことが大切だと思う。スイカの絵はスイカだけでなく、大好きな虫がたくさん描けることが素晴らしい。男女別に描いた絵は、その活動の目的・理由が一体何なのか。絵本を見て描くことはコピーであり、子ども自身の絵ではない。子どもの興味を大事にして欲しい。

〈五歳児〉

絵本「ライオンとねずみ」の絵。絵の具に合う画用紙の色について迷う。移動動物園でふれ合った動物の絵。子どもへの言葉がけが知りたい。五歳児からプレゼントされた国旗の絵。

○色彩感覚は、それぞれあり、自分がきれいだと思う色を子どもに伝えることも大切だと思う。言葉かけは先生と子どもの関係の中で見つけていってほしい。

〈小学一・二年生〉

題材「お日様と仲良くなろう」の絵。バラ園の絵。言葉かけや絵を見る力について知りたい。

○これだけ違う太陽が描けていて素晴らしいと思う。描きだしたら言葉かけはいらない。後で、子どもの話を聞き、子どもの世界に共感

して、そこから絵を見る力をつけていく。

絵を読む会　は
【和歌山幼年美術の会】
担当：山下 悦子

一歳児～五歳児までの絵が提示されました。そこで、年齢毎に見ていくことになります。

一歳児も二歳児も先生の指示がまだ理解できていない発達段階ですので、指示通り子どもが描くことはまずないということを知り、先生も悩むことなくゆったり受け止めていきましょう。という助言がありました。

三歳児になると、急にすごく描かれた作品の提示があり、驚かされました。その一つの理由には、園で作品展があり、「描けていない」ということが保護者に受け入れてもらえない現状があるようです。けれども先生としては、ありのままの子どもの作品を展示していきたいものです。

四歳児は、一番作品数が多かったです。先生方は、色々な場面でたくさんの悩みを抱えながら、毎日を過ごしている様子が良くわかりました。

五歳児は、一園の作品の提示でした。先生として大切なことは、子どもの作品にしっかり寄り添うこと、何を伝えたいのか感じとってあげることです。アドバイスのメニューはたくさん持っておくことが望ましいです。時には、アドバイスの視点を変えてみることも大切です。これで先生としては、最高ということは絶対にありませんので、目の前の子ども達と共に、一歩一歩あゆんでいきましょう。

絵を読む会　ほ
【京都幼年美術の会】
担当：濵上 真由美

絵を読む会《ほ》では、絵を持って来てくださった方だけでなく、参加された方皆さんから、質問や感想やアドバイス、また、他には、このような展開があるのではないかという意見も出ました。

中でも、子どもの絵に対して、指導が入りすぎて描かせてしまっているのではないかと悩んでおられるケースもありました。ある園では、過去に園の方針で、表現活動に力を入れすぎ、子どもの自主性、発想する力を潰してしまっていることに気づき、職員間で話し合い変えてきた話も聞かせて頂くことができました。

その中から、子どもの表現活動は、子どもが満足でき、「たのしかった。」と思えるものであり、「また、やってみよう。」「みんなでいっしょにしてみよう」という意欲につながるもので、その表現した子どもの思いを大切にしないといけないのではないか。とまとまりました。

それぞれの先生方のいろいろな経験から様々な表現活動の展開の方法があり、今回の絵を通してこれからも子どもたちと共に表現活動を工夫しながら楽しんで頂きたいと思います。

絵を読む会　へ
【京都幼年美術の会】
担当：安食 美子

「絵を読む会」が参加者と学生と共に学べる研修会であることに意義が感じられた。質問・疑問に対して、和歌山幼美の稲垣先生、全国幼美の矢野先生による丁寧な受け止め方と的確なアドバイスで、自発的な意見が活発になり、場の雰囲気を徐々に盛り上げていただけた。又、「カブトムシが飛んだ」という一枚の作品は、園の自然環境により、カブトムシ博士の誕生や若い学生の感性を惹きつけるものがあったのだろう。学生は、「褒め言葉として輝いている」と述べ、発言しているその顔も輝いて見えた。他にも、保育者からの発言で、「上手に描けたね」の意味が今まで解らなかったが、今回よく理解できたとの意見が印象的でした。

園で描いた作品は、家庭にお渡しするので、写真でしか残らない所もあり、実物を持参できないこと等、どう対応していけば良いのか今後の課題であると感じました。

絵を読む会　と
【京都幼年美術の会】
担当：荒井 まき子

持参頂いた絵は、一歳・三歳・四歳・五歳の総計二十五枚。子ども達が絵を描く場合、先ず保育者の意図や狙いがどこにあるか、何に気付かせたいか、育てたいか、背景によって絵の読み方が変わる為、その辺をお話しいただいた上で、ディスカッションに入った。

最初、三原色を意識して色を与えているとの一歳児の絵に対して、色は興味の入り口で、どの色も美しく楽しむものとの意見、年齢が上がるに従い、他の子をまねる子、描けない子、描かない子、描きあがった絵を黒で塗りつぶしてしまう子等、定番の質問に対し、フォロー者からも助言者からも、まねる事はいけない事ではない、むしろその子自身の描いた部分を強調して認め、共感する事で自信につながる。自信がつけば描けない子はいない。子どもの絵には、時間の経過や終わりの意味で塗りつぶす場合もあります。

学生からも実習に行った園で、子ど

も達への言葉がけに苦慮された旨の話しや積極的な質問が続き、これからの保育者として頼もしく感じました。又、お二人の助言の先生方からも、要所で的確なご助言を頂き、大変有意義で充実した会になったと思います。

この絵を読む会を通して感じることは、子どもの絵は結果ではないという事、遊びの延長として、そのプロセスで子ども自身が色々と試行錯誤する事で、心が働き同時に成長する。そこにこそ、ねらいがあると思う。子どもと共に全てに興味を持ち、常に成長していきたいと願っています。

絵を読む会 ち
【京都幼年美術の会】
担当：寺内 静子

助言者：藤井行夫、フォロー者：南方秀昭、園長・保育者・学生計三十一名で始まる。絵の持参九園、〇歳児から五歳児までの絵についての「絵を読む会」となります。絵について皆で話し合い、フロアーからもアドバイスがあり、助言者からも一人ひとり丁寧な助言で、フォロー者からも、絵の見方以外の方向からアドバイスをもらい、保育の中の子ども達の安全・危険性について指導して頂き、保育者はもちろん学生にも良い学びになったと思いました。特に遠方から来てくださった先生のこの会に対する意気込み（パワー）は、参加の皆さんに伝わったと思います。幼美の目指している方向性というものを、しっかり勉強して持ち帰り、園での職員会議で発表したいと言われ、司会者として責任を感じる一時でした。

・年齢ごとの意見や疑問点の話し合いの内容です。

〇歳児～二歳児

安全面に気をつける。子ども達の生活の一部である。先生が大好き。

三歳児～四歳児

絵は生活の一部。自分で気付かせるように配慮する。環境を考える。材料用具の準備の仕方。無理をさせない。こどもの活動を待つ保育。

五歳児

描きたい気持ちを大切にする。気持ちを受け止める。一人ひとりを認める。一緒に遊べる保育者。保育者自身が感動する。豊富な体験をさせてあげる。材料用具の勉強。

〈全体まとめ〉

一人ひとりの心が育つ保育を考える。待つ保育。ほめて育てる。環境を考える。何事も当たり前ではない。感謝・感動を忘れない。描きたい気持ちを大切にする。保育者の行動、言葉かけの大切さを知る。どんなことにも興味を持たせてあげる保育。子どもと一緒に遊べる保育者であり、特に乳児には、安全面に配慮する。保護者には、一日の出来事を出来るだけ伝え、安心してもらう。

絵を読む会 り
【滋賀幼年美術の会】
担当：高橋 容子

絵の作品数（二歳児→一園・五枚、三歳児→三園・十枚、四歳児→一園・八枚、三～五歳混合クラス→一園・五枚　計二十八枚）

【二歳児】

・描きすぎの子どもへの声かけについて

・「もういいよ」とすぐに描き終わる子どもへの声かけについて

◎描く意欲のある子どもについては、裏面まで描いてもよい。「やりきった感・満足感」を味わわせていく。

◎子どもが描いている表現をありのまま受け止め、具体的に認めていく。

◎のびやかに描ける気持ちを保育の中で育てる。線や面でのはみ出しの表現を気にしない子どもに育てたい。

◎クラッカーの音を、子どもなりに絵に表現しようとする姿が見られた。

【三歳児】

・表現の途中で、文字や数字・記号等を描く子どもへの声かけについて

・三歳児らしさの表現とは。

◎保育者の待ちの姿勢がとても大事である。

◎描きたい色・描こうとする表現など、限定しないで子ども自身に考えさせていく。

◎大きく描かせたい「ねらい」があるときは、大きく描けるような保育の中身を工夫する。

◎三歳児の表現において日をまたがさず、その日のうちに一気に描かせていく事が望ましい。

◎文字や数字を覚えたばかりで、得意に描く子どもの気持ちを受け止め、大切にする。

◎三歳児らしさとは、概念にとらわれず、思いをありのまま表現につなげていくこと。描く時間・安心して描ける場・題材・魅力のある素材や用具材料等、発達段階を考慮する。描きたいもののみを素直に表現できることが望ましい。

◎一学期に絵の具に触れて遊びを貯めていくことで、二学期には自信がつきダイナミックな表現につな

がる。

【四歳児】

・支援を必要とする子どもへの声かけについて

◎保育者の思い入れ通りにいかないことこそ、子どもの素直な表現であると考える。

◎友達の作品を見て、真似て育ちあう姿も大切にしていきたい。

【三～五歳児混合クラス】

・三学年混合クラスの子どもへの関わり方について

◎ハサミなど安全性に問われるものの関わりは、三歳児の場合、安全面については丁寧に伝える。

◎混合保育におけるプラス面マイナス面がみられる。どちらも経験する中で、子ども自身が学んだり、子ども同士が刺激を受け合ったりする過程を大事にしながら学級経営につなげていく。

【まとめ】

乳幼児期の子どもは、毎日の生活や遊びの体験や経験を積んで、表現につなげていく。表現に正解はない。子どもが思いを込めて描いたり作ったりすること全てが100点である。生活や遊びを通した体験や経験より、感じたことを心に溜め込んだかが豊かな表現に表れる。

絵を読む会　ぬ

【滋賀幼年美術の会】

担当：西山 直美

参加者三十二名（内、学生十四名）

保育所（園）・幼稚園・認定こども園からの参加があり、一歳から五歳までの幅広い作品が多く持ち寄られた。

・他児の絵と見比べてしまう保護者に対する伝え方
・自分は上手に絵が描けないと思い込んでいる子ども
・表現の幅が広がらない子ども
・汚れることを嫌う子ども
・服が汚れてくることを嫌う保護者
・画用紙の大きさや画材
・集中が続かない子ども

等、絵の持参者から投げかけられた絵を通しての自分の保育・教育についての、悩みや不安に対して「自分も同じだ」というように「うん、うん」と頷く参加者が多かった。

午前中の講演や、又、参加者達の経験や実践をもとに話し合い・考え合えたことは、保育者達の安心、励み、また自信にもつながったようだった。

子どもの絵に関わる悩み、不安は様々に沸き起こってくる。それは、子どもと真剣に一生懸命に向き合っているからこそ出てくるものであり、その姿や思いは、子ども達に通じ、子ども達は感じていてくれるであろう。そこからが、保育教育の第一歩だと感じ合えることが出来た有意義で充実した研修となった。助言やフォローの先生方からも、その都度、アドバイスをいただけたことも幸いであった。

実技研修

実技研修A　【全国幼年美術の会】

石膏と粘土を使った造形あそび

講師：木代 喜司

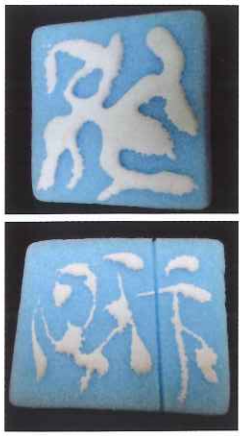
ウレタンは、畳屋さんや建築現場にてもらってきます。金切りのこぎりで適当な大きさに切断します。石膏の粉を画材店で少し（コーヒーカップ一杯あれば充分）買ってきます。

どんぶり茶碗に（プラスチック製が良い）七分目くらい水を入れ、そこへ石膏を水と同じ量を入れてスプーンでよく混ぜます。（水の中へ石膏を入れていき、石膏が水の上へ盛り上がれば止める）

石膏と水の混じった液体をスプーンですくって、ウレタンの板の上に垂らします。適当に、ポトンポトンあるいはタラタラと落とします。（何も考えないで垂らします）

石膏が固まるまで一時間程、待ちます。石膏がしっかり固まったら、偶然できた滴の形に鉛筆で絵を描いていきます。偶然にできた石膏の形に、それぞれ思い巡らせ、一人ひとり独自の絵を描きます。

写生をするのではなく、頭の中にあるイメージを引っ張り出して描いてください。夢のような見た事のない風景や動物や人物が出てくれば面白いです。あなたの頭や心の中にある想像の世界が描ければ成功です。みんなで見せ合って話し合い、楽しめれば成功です。絵を描くということの楽しみを知っていただければ素晴らしいです。



①ウレタンに石膏を垂らす
自由に落とす

②石膏に鉛筆で線を描く
自由に面白い線を描く

実技研修B 【全国幼年美術の会】

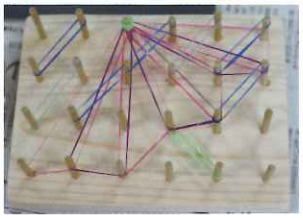
木に触れよう、木であそぼう！
～木育のすすめ～

指導：矢野 真
補助：豊藏 侑未
記録：奥野 文華

今回の実技研修では、国産のヒノキを用いて紙やすりで「磨く」、鋸で「切る」、木槌で「打つ」という、木育の基本となる活動を行なった。

紙やすりで「磨く」段階では、参加者の方々は熱心に取り組む様子が窺われた。時折、磨いたところを手で確認し、香りを楽しむ様子が見られ、研修室もヒノキの良い香りに包まれていた。「切る」段階では、鋸を使って丸棒を二十四本切るため、数の多さや細い棒を切る難しさことに苦労している様子が見られたが、参加者自身が工夫を行い、切りやすい方法を考えているようであった。「打つ」段階では、木槌の柄を短くし子どもたちにとって扱いやすくしていることに対して、用具の工夫に感心する参加者が多く見られた。木槌を使う参加者のなかには、力の加減や角度によって打ち込んだ棒が折れることもあったが、熱心に取り組んでいた。カラーゴムを掛けて絵にする段階では、参加者それぞれが思い思いの絵にしていた。一度描いて終わりではなく、何度もカラーゴムを掛け替えたり、その掛け方を三次元的に楽しむ参加者もいて、それぞれ個性のある作品が完成していた。

実技研修後に感想を尋ねると、ヒノキの良い香りがしたと言う声や、表面がつるつるになって良かったと言う声が多く聞かれ、木に対する興味や関心が高まっていたように感じた。今回の研修で「木育」が、実際の保育現場でも取り入れられ、子どもの感性を育むことや人と人とのつながりを考える機会になることを期待する。



実技研修C 【東北幼年美術の会】

世界一美しい色水あそび
～光を生かした造形表現活動～

担当：相馬 亮

実技研修Cでは、「世界一美しい色水遊び～光を生かした造形表現活動～」という活動を行いました。まずは、十五分ほど簡単な「色彩学」を学び、色彩の基本的な知識や日常生活における色の重要性について理解を深めました。

今回はプリンタインク（C：シアン、M：マゼンタ、Y：イエロー）を使用し、色水づくりから行いました。できあがった色水は、色の透明度、混色の美しさ、沈殿や変色のない高い耐性等、プリンタインクを使用して色水づくりを行う利点を、参加者全員が理解して下さったように感じます。

色水づくりの後には、光を用いて、投影される色の光の美しさを感じる活動を行いました。まずは、教室を飛び出し、屋外へ。太陽の光で映し出される美しい色の光が、様々な場所を美しく彩ります。その後また教室へと戻り、暗転した教室で、準備した懐中電灯を使用した活動を行いました。クリアカップに入った色水に懐中電灯の光を当てると、机上の白い画用紙に光の線が浮かび上がります。光を交差させ加法混色を試したり、クリアカップの底から天井へ向かって光を当て、色水が動くとともに、ゆらゆらと光の波が浮かび上がることを試したりと、様々な遊びを発見し、思う存分色水遊びを楽しむことができたように感じました。

研修後は、多くの先生から、早速子どもたちと活動してみますという沢山の声もいただきました。ぜひ活用していただければ幸いです。

実技研修D　【石川幼年美術の会】

和紙染め「こまった…」を「たのしい！」「おもしろい！」に変える工夫

担当：森田 ゆかり

石川幼年美術の会として初めて実技を担当し、三十三名にご参加いただきました。

「和紙染め」には多くの魅力が詰まっています。いつもの紙とは違う「触り心地」の新鮮さ、その紙に染め液がじゅわぁ～っと吸い上げられていく不思議さ、折り畳んだ紙を広げてみるまでどうなっているか分からないドキドキ・ワクワク感、偶然生まれる美しさ・面白さ、染めた紙を活用する楽しさ…など、何度やっても飽きることがありません。

しかし保育現場では、染め液が机や床の上にポタポタこぼれる、こどもだけでは紙をうまく広げられない、援助に手がかかるなど幾つもの「困ったこと」が起こり、そのことを面倒に感じ楽しい遊びから遠ざかっている保育者も少なくないようです。

困ったことがほとんど起こらず、保育者も一緒に楽しみながらこども一人ひとりの表情や行為を「見る」、口にする言葉を「聴く」、心動かしている瞬間に立ち会うことができるよう、余裕が生まれる小さな工夫を多数紹介しました。こどものように目をキラキラさせ没頭する姿、隣り合わせた方と協力しながら和紙を広げ、驚きや感動を共感し合う姿が見られました。一人四枚の和紙を染めましたが「どれもいい」「偶然の美しさと手軽さに感動した」「ぜひ園でやってみたい」という声が多数聞かれ、さらにもう一枚染める人も続出しました。担当者も今回が二回目で改善を加え、二、三歳児や障害をもったこどもと遊ぶ時の工夫もお話ししました。

実技E・F・G・H・I・J・K・Lは、次号にてご報告します。

あとがき

こどもの絵を読む会なくして、幼美を語る資格なし。今年の夏季大学でも、こどもたちの絵を持参くださった先生方によって、各フロアは、熱心に話し合いがなされていました。

しかし、どうしても気になるのが、本来、自分で実現したいことが山ほどあるこどもたちの持つ有能さにあまり気にはとめず、少しでも多くのことを教え込もう、習得させようと、程度の差こそあれ、そのことに一喜一憂されているのではないか？　という先生方の存在です。そのような思いに通底するものは、「こどもはいろんなことを知らない、出来ない」という〝こども観〟であると思います。

図らずも、そうしたこども観を変えたい！　との思いで、「造形あそび」を考え出されたのが、元文部科学省教科教育調査官、視学官を務められた西野範夫先生であることは、多くの先生方はご存じであろうかと思います。

西野先生とは、近年同じ会議でご一緒させていただくご縁に恵まれ、毎回貴重なお話を伺い、常にご指導いただき、本当に幸せな時間を頂戴しています。

先生の口癖は、「大人はこどもを誉めるとかではなく、もっとこどもに驚いて欲しい。」です。そして「〈いのち〉を大切にしましょうと、よく言うけれど、いのちを傷つけてはいけない、というのではない。こども達のひとこと一言、ひとつの行為、それが〈いのち〉の現れ。それを大事にしましょう、と言うのが、〈いのち〉を大切にしようという意味」とよく仰っています。

先生は、「こどもの描いた絵、その一枚一枚を大切にするとは、その子の生きた証し〈いのち〉を大事にすること」と仰います。

私達の有力後援団体である（公財）美育文化協会の季刊誌『美育文化ポケット』の新刊一九号では、インタビュー特集として、西野範夫先生のお話がたっぷり紹介されています。

（羽渓）